

高齢者の暮らしを考える 4

広報まつさか7月号では『医療機関から「介護施設在宅」へのシフト』、8月号では『求められる地域住民の参加』、9月号では『認知症と向き合うことについて』をテーマに、シリーズを続けてきました。今回は、在宅医療に繋がる看取りなどについて、話を聞きました。

インタビュー

「看取り、地域でのつながりについて」

看取りについて大切なことは何でしょうか。

看取りは、本人・家族・医師・看護師等との連携が最も重要になります。今後は自宅での看取りが多くなると思いますが、在宅医療中心の医師とは違い、外来中心の医師には看取りの経験がなく理解が乏しい方、専門外とされている方もいるため、医師全体の意識を底上げする必要があります。また、寿命は医師の力でもどうすることもできません。長く生きてほしいと家族は思うかもしれませんが、延命行



長友 薫輝

松阪市地域包括ケア推進会議 会長

三重短期大学教授。同大学地域問題研究所所長。社会福祉士。日本医療経済学会役員なども務める。

為自体が本人にとってはとても苦しく幸せなことでない場合があります。亡くなることにしっかりと向き合う必要があります。

高齢者の生活を支えるためには関係者間の情報共有が必要と思いますが、個人情報の扱いや保護についてはどう考えればよいでしょうか。

個人情報を守らなければなりません。しかし、「その人のプライバシーを守るために何も教えられない」ではなく、本当は「その人を守るために個人情報を共有すべきもの」だと考えます。本人さえよければ専門職内で情報の共有が必要で、医療介護のためだけではなく、防災のためにも必要だと考えます。災害があった時、認知症や一人暮らしの高齢者はすぐに避難できるわけではありませので、情報は地域住民とも共有する必要があります。

在宅療養が困難となる理由

医療者の要因

- 在宅医療への理解不足
- 人手不足
- 医療者間の連携不備
- 急変時への対応困難
- 診療報酬上の問題

患者さんの要因

- 病状、急変の時の対応
- 介護者への配慮
- 家族関係

ご家族の要因

- 介護者の不在
- 介護負担・不安感
- 世間体など
- 住環境

「個人情報を守るためにできない」と言われることが多いですが、その人を守るために情報を共有できるようにしていくことが重要ではないでしょうか。また、インターネットなどの普及で便利な世の中になりましたが、なんでも機械上で管理するのではなく、顔と顔が見られ安心できる関係が大切です。例えば、地域でお祭りがあると地域住民同士の関わりができますので、文化や行事があるところは繋がりがとても深くなります。高齢者を「孤立させない」ことが最も重要なのです。